

## 【平成23年1月-3月授与分】 博士学位論文内容の要旨 及び審査の結果の要旨

<https://hdl.handle.net/2324/20171>

---

出版情報：2011-10-07. 九州大学  
バージョン：  
権利関係：



|             |                                                |
|-------------|------------------------------------------------|
| 氏名・(本籍・国籍)  | ひめ の じゅん いち<br>姫 野 順 一 (大分県)                   |
| 学 位 の 種 類   | 博士 (経済学)                                       |
| 学 位 記 番 号   | 経済博乙第 1 4 8 号                                  |
| 学位授与の日付     | 平成 2 3 年 2 月 2 8 日                             |
| 学位授与の要件     | 学位規則第 4 条第 2 項該当                               |
| 学 位 論 文 題 目 | J. A. ホブスン 人間福祉の経済学：ニュー・リベラリズムの展開              |
| 論 文 調 査 委 員 | (主査) 教 授 関 源太郎<br>(副査) 教 授 磯 谷 明 徳 准教授 荒 川 章 義 |

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、過少消費および帝国主義の論者として断片的に知られたイギリスの経済社会学者 J.A. ホブスンの経済社会論の著作の言説に注目し、その内容を「人間福祉の経済学」という歴史理論の型と把握し、その政治・政策思想の意義をイギリスのニューリベラリズム（新自由主義）の思想史のなかで解明したものである。

そのため第 I 部では、ホブスンの言語のコンテクスト分析に基づいて「経済社会論の歴史型」が抽出され、第 II 部ではイギリスのニューリベラリズムにおけるホブスンの思想的特質を、同時代の社会改良思想と対比している。

第 I 部は「人間福祉の経済学」に収斂するホブスンの経済社会論の歴史的特質の解明である。それは市場不均衡の認識を基盤とするホブスンの経済社会論の動態的性格の解明となっている。その作業は 1890～1900 年代の初期著作群に内在するものであり、ここで解明されているのは①生産－消費のマクロ不均衡認識に基づく「市民の消費」を基軸とする経済社会の動態（第 1 章）、②独占形成と絡む新しい機械観に基づくルーティンとアートの「労働の二重性」把握と古典的派分配論の変容（第 2・3 章）、③ラスキン論を梃子とした経済社会論の静態から動態への転化（第 4 章）、④社会進化論の経済社会分析への適用（第 5 章）、⑤新自由主義的を基盤とした帝国主義論となる国民経済から世界経済分析への視座の展開（第 6 章）であり、その間のコンシステントな歴史的論理体系である。

第 I 部の意義は、①アダム・スミス、デビッド・リカードウ、J.S ミル等古典学派経済学派の唱えた経済理論の組み替えの分析、②独占と景気変動（大不況）という新資本主義の現象に直面し、経済社会史研究の新しい成果を取り入れて形成された経済社会論、③経済の不均衡構造認識に立脚する「経済社会」の統合的な動学理論の解明にある。このようなホブスンの歴史的理論の型の抽出により貧困問題や帝国主義といった時代の「課題」に迫れない、アルフレッド・マーシャルやセシルアーサー・ピグー等ケンブリッジ学派と対抗的な「経済と国家および社会が統合された歴史的な経済社会論」としてホブスンのニュー・リベラリズムのコアとなる特質が解明された。

第 II 部は、第 I 部で析出された「人間福祉の経済学」の経済社会理論の型を基準とし、19 世紀末イギリスにおける新自由主義の変容の中でのホブスンのニュー・リベラリズムの政治・政策思想の意義が人間・市場・国家・社会の要素分析により解明されている。

すなわち第 9 章では、19 世紀イギリス自由主義の起源となる急進主義者ジョレミー・ベンサムおよび J.S ミルの功利主義的国家論の要素が、言語のコンテクスト分析から解明され、自由保守主義者ウォルター・バジヨットの国家論の要素と対比され、第 10 章ではこれらを継承・変容させたヘンリー・シジウィック、アルフレッド・マーシャル、慈善組織協会 (COS) の国家論の要素と比較されている。

さらに第 11 章では、世紀末の「経済社会論」を統合するイデオロギーとしての社会進化論に注

目し、ホブスンの新自由主義の特質を浮かび上がらせている。ここでダーウィンとスペンサーの社会進化論、T.H.ハックスリーの「倫理の進化」が分析され、W.H.マロックの「貴族の進化」およびホブスンの社会進化論が対比されている。ここでホブスンのニューリベラリズムにおける「経済社会の制度アプローチ」の特質が浮かび上がっている。

第 12 章では同時代の社会改良思想としてのフェビアン協会の集産主義、ホブスンに近いウィリアム・クラーク、距離を置くドニー・ウェップの政策思想が比較され、ホブスンのニューリベラリズムのコアとなる政治・政策思想の特質が抉り出されている。

ニューリベラリズムは 20 世紀に入り政治・政策を誘導する思想となるが、世紀初めにその内容は自由帝国主義、社会民主主義、自由経済放任主義、社会帝国主義と分岐する。そこで第 8 章および第 13 章では、経済分析と民主的な社会分析が融合した新自由主義の政治・政策思想のイデオロギー要素を分析するため、ジャーナリズムにおけるホブスンの言論活動が解明され、第 14 章および第 17 章では、ホブスンの盟友レオナルド・ホブハウスおよび一面的な継承者ケインズのニュー・リベラリズムとの対比が試みられている。

最終の第 15 章では 1920 年代における新古典派経済学経済政策思想の学説批判が吟味され、第 16 章ではこの時期「人間福祉の経済学」として完成されるホブスンの政治・経済政策の具体的な吟味に立ち至っている。

以上本論文は、近年英米でホブスンの理論やビジョンの一面的解釈を批判して進んだ、リビジュアルなホブスン再評価の先行研究を踏まえ、ホブスンに独自の歴史的な済社会論の型を析出し、ニューリベラリズムの政治・政策論と評価されるホブスンの経済社会論を「人間福祉の経済学」として抉り出した。

第 7 章（補論 1）および第 18 章（補論 4）は、英米における最近のホブスン研究の包括的なサーベイランスである。

## 論文審査の結果の要旨

19 世紀末のイギリスにおいて、従来のリベラリズムに替わってニュー・リベラリズムという思潮が台頭し、戦後福祉国家の思想的一源流ともなった。ニュー・リベラリズムの研究は、1970 年代に市場原理の徹底化を高く掲げる、いわゆるネオ・リベラリズムの台頭を背景に、近年、活発化することになった。この新しい P. クラーク（1978）や M. フリーデン（1978）による研究は、従来ニュー・リベラリズムの中核は T. H. グリーンに発すると捉えてきたのに対し、むしろそれを J. A. ホブスン（1858～1940）や L. T. ホブハウスに求めた。本論文は、この新しい研究を継承し発展させることを企図し、ホブスン研究を中心に据える。

本論文は、ホブスンの経済社会論を「人間福祉の経済学」と特徴づけ、その形成過程を取り扱う第 1 部（1～8 章）、および、ホブスン以外のニュー・リベラリストを含め、彼と時代を前後する様々な諸思想家との対比でホブスンの独自性を浮き彫りにしようとする第 2 部（9～18 章）から構成される。

第 1 部においては、最初の著書（マメリーとの共著：1889 年）でホブスンが生産と消費のマクロレベルでの不均衡を論じたことを描き出した後、ホブスンによる「非自発的失業」の発見とその国家による救済（1891、96 年）、独占の形成に伴う「独占的レント」固定化の認識とその再配分政策の提唱および「社会立法による『産業有機体』進化」の展望の提示（1894 年）などを行う。姫野氏はここにホブスンによる「人間福祉の経済学」の「原型」を見る。さらに姫野氏は、ホブスンが ラスキンを批判的に継承し進歩的で動的な「社会経済学」を打ち出し（1898 年）、1901 年には「社会的効用」の概念を打ち立てたが、これには国家による社会サービスの向上を含意させていたと指摘する。次いで、ホブスは、これまで論じて来た「国家の介入による個人の自由の実現」の問題（ニュー・リベラリズムの問題）を国際経済関係にまで押し広げているが（1902、04 年）、これには「コスモポリタンな世界市民的」内容が盛り込まれていると評価する。

第 2 部では、まずベンサム、J. S. ミル、バジヨット、シジウィックおよびマーシャルの国家観を取

り上げ、それらと対比してホブスンのニュー・リベラリズムの特質を暗示する。次いで、ニュー・リベラリズムの重要な構成要素である社会進化論の展開を、ダーウィン、スペンサー、ハクスリー、マロックを祖上にのせて概観し、この文脈においてホブスンのニュー・リベラリズムを「社会民主的」と特徴づける。さらに、フェビアン主義者、ジェヴォンズ、マーシャル、ピグーらの経済学と対照し、ホブスンのそれが「人間福祉の経済学」であることを再確認する。さらに、1910～20年代にホブスンが「人間福祉の経済学」の観点から提唱した経済・産業政策は自由党・労働党の『福祉国家』形成プランに大いに貢献したと意義づける。

本論文は、ホブスンの初期から晩年までの著作を丹念に渉猟し、その過程を彼の「人間福祉の経済学」の形成と展開として理解し直すと共に、同時代の社会改良思想を広く吟味することにより、その特質や歴史的意義を明確にしている。その意味で、本論文は本格的なホブスン研究だと評価できる。特に、これまでニュー・リベラリズム研究が政治思想に傾斜しがちであったことを考慮するとその意義は大きい。もっとも、ホブスンの「人間福祉の経済学」の形成・展開・完成を考えると本論文の部や章の構成についてさらに配慮すべきであったし、また同時代の諸思想の取り扱いについてもっと精確を期すべきであったと思われる。とはいえ、これによって本論文の意義が損なわれるわけでは決してない。

以上の理由から、本論文調査委員会は、姫野順一氏より提出された論文「J. A. ホブスン 人間福祉の経済学：ニュー・リベラリズムの展開」を博士（経済学）の学位を授与するに値するものと認める。